

資 料

昭和51年度修士論文要旨

自己実現派とその教育論

島 崎 保

教育に関するアプローチの困難さは、教育目標と、それを支える人間観の混迷にあるという視点から、これらの問題に積極的に発言している人間性心理学、その中でも特に自己実現派と呼ばれる人々（K・ゴールドシュタイン、G・オルポート、A・マズロー、C・ロジャーズ、S・ジュラード）の思想を概観し、そこに見られる「精神的健康性」が教育目標としていかなる意味をもつかを考察し、併せて彼らの思想の宗教的背景にも論及を試みた。

序章「人間観とその視点」では、まず本論が教育目的論的観点から叙述されることを述べた後、素質決定論対教育決定論といった二分法的対立を超えるべく、ハーズバーグの動機づけ理論を引用した。第一章「自己実現派の人々」では、人間性心理学を「人間性の科学という立場から、愛、創造性、価値追求性、自己実現等の人間的特性をとりあげ、人間を全面的にとりあげようとする」ものであると定義し、教育的観点からは特に「精神の健康」という概念が重要であると指摘した。そして第二章「精神の健康性」で従来「精神衛生」と呼ばれて来たものに①Mental Hygiene ②Mental Healthの2つの側面があることをとらえ、教育においては、後者がより重視されること、それはパーソナリティの「動的な平衡」の概念であると規定した。さらに先にあげた人々が、このような意味での精神の健康についてどのように述べているのかを考

察した上で、これが教育に適用される時、単なる「自然成長論」の焼き直しではない事を確認した。

最後に、第3章「自己実現派と宗教的背景」では、彼らの思想が、カルヴィニズム→ピューリタニズム→左翼プロテスタンティズムという伝統と深いかわりがあると考えられることを推測したがそれは、彼らの思想を生み出す背景という点よりも、それを受け容れる基盤という点での関係がより大きいと考えるに至った。

ラッセルの思想

菅 原 伝 一

ラッセルは今世紀最大の哲人の一人である、と一般に言われている。認識論・論理学・数学・政治・経済・宗教・倫理学等々の百般の学問の分野に通達した千手観音式の万能学者である。今日、西洋世界を中心にして、ラッセル研究活動が徐々に行なわれているし、又、日本でも、早稲田大学を中心とする「日本バートランド・ラッセル協会」がラッセル研究を行なっている。しかしながら、彼の論理学書「プリンキピア・マテマティカ」を代表とする学問上の功績が、余りにも抜きんでているがため、又、彼が余りにも人智の広い学問の領域をマスターした人物であるがため、その研究は何人もその一流の専門学者達が束になって取り組まないと出来ない有様である。正に、今世紀最大の問題提出者

の面目ここにあり、といった所が…。先ず「論理学」の分野では、アリストテレス以来の画期的な論理学者であり、師ホワイトヘッドとその共著「プリンキピア」は、余りにも専門的で難解で問題点の多い著作であるため、ラッセル研究家アランウッドなどによれば、世界で20人以上もこの本を読んだ者はないだろう、という位である。読まずながら書棚に飾らせ立派な本だ、といわれるのがこの「プリンキピア」である。次に「理論哲学」であるが、この分野に於ける彼の哲学は「論理分析の哲学」に他ならないのであり、この哲学は主として、ドイツ観念論哲学の大成者ヘーゲルの絶対精神を中心とする哲学に対する批判から、そしてまた、19世紀末葉の自然科学の発達と共に生じてきた科学哲学なのであり、その特徴として挙げられるものは、数学・物理学等の影響であり、その影響に促された所の科学的・修正主義的認識論である。次に「社会思想」の分野では、私はかなり専門的に、主として仏法の次元から、ラッセルの、「科学的理性」の現代的意義と、その理性が占める所の哲学上の位置を探究した。この論評については、かなり独創的に考察したがため、部分的な修正と補足的な肉づけが必要であろう。

ヘーゲル哲学の教育思想

山 本 冬 彦

現在、教育を論じる場合、必ずといっていいほど、人間形成、自己形成、主体形成……といったことばが使われている。しかし一体、この「形成」ということばの概念はどのような意味をもち、いかなる歴史的背景の中から生み出されてきたものなのだろうか。この疑問が本論文

を書くに至った動機のひとつである。

人間が自分たちをとりまく旧来の封建的な桎梏を打ち破り、世界に対して開かれ、自然が彼らに与えた可能性を十分に発揮し、人類社会の発展を自己の課題として全うする積極的な存在であることをみ出したのは、近代ヨーロッパの啓蒙主義思想家たちであった。

ヘーゲルはこうした啓蒙主義思想家の考えを引き継ぎながら、その著「精神現象学」の中で、それまでの哲学者が考えていた「自然」——いわゆる能産的自然と所産的自然とが同一視された自然——を、行為や運動の主体としての意識（自己意識）を含み込んだ「精神」に置き換え、古代ギリシャのポリスの世界から、中世をへて近代に至る歴史の動きを、その精神の自己形成過程としてとらえ、またその展開を個々人の意識の、順序性をもった段階的な発達過程というかたちで開示した。

そこで本論文では、カント、フィヒテ等のヘーゲルに先立つ思想家たちの教育に関する言説に触れながらも、「精神現象学」、特にその序文と「自己疎外的精神」の章において述べられている精神の自己形成論の特質、その「疎外」「外化」「否定」を契機とした弁証法的な展開構造を明らかにし、ヘーゲル哲学に本源的に内包されている教育思想に迫ろうと試みた。